

---

これまでイエスは、ガリラヤ湖近郊、主にはカペナウムの町を中心に病の人々を癒し、また悪霊を追い出してきた。そして安息日ごとにユダヤ人の会堂に入っては、御言葉を教えてこられた。

また会堂では、パリサイ人や律法学者たちからのいろいろな質問を受けてきた。そしてある安息日に病人を癒したことから、彼らはイエスに対していよいよ殺意を抱くようになった(3:6)。

この安息日の出来事が、律法学者たちとイエス達との決定的な信仰の分かれ道となった。

その様な中、イエスは夜通しの祈りを捧げ、ご自分の身近において、本来の目的である福音を宣べ伝えさせるために、12弟子をお選びになった。

.....

12弟子が選ばれた後、今度は身内の者たちが、「気が狂ったのだ」という噂を聞き、宣教ごっこをしているイエスをどうにか連れ戻そうと出てきた。

けれどもイエスはこの時も、たとえ身内の者であっても「神の御心を行う者は誰でも兄弟姉妹また母である(3:35)」と、信仰者としての明確な分かれ道を示された。

さらに同じ時、わざわざエルサレムからやって来た律法学者たちが、イエスに対し、『彼は悪霊のかしらであるベルゼブルによって、悪霊を追い出しているのだ(3:22)』と批判し、イエスとの間に論争があった。これらした後イエスは会堂ではなく、ガリラヤ湖を再び選び「神の国」について、「種まきのたとえ」からはじめて5つのたとえ話をされた。

さて本日の箇所は、こうした後に起こった出来事であった。

マルコは、35vで「その日のこと」と記している。

文脈的には、3：14でイエスが12弟子を任命されてからの続きとも取れる。これは共観福音書のマタイと同じ立場である。

しかし同じ共観福音書のルカによれば、「その日のこと」を別の日と記している。福音書によって若干のずれがある。ゆえに35vに記されている「その日のこと」とは、いったいつの日なのかを明確にすることは難しい。けれども、共観福音書に記されている話の流れと内容はほとんど一緒であることから、イエスと弟子たちはそれまでの一連の宣教活動により、食事をする暇もないほど多忙であった(3:20)と断定できる。

そのためか、イエスは弟子たちに、群衆から離れて自分たちだけで「向こう岸へ渡ろう」(4:35)と言われた。

そして彼らは、束の間の休息を得ることが出来た。弟子たちにとっては、イエスとだけ過ごせる贅沢な時だったとも言える。

さて、この時彼らが乗っていた舟とは、大型船ではない。

いわゆる釣り船のことで、大人が無理やり乗れば十数名は入るといった舟であった。

おそらくこの時乗っていた舟は、ペテロとアンデレの船であろう。彼らは元漁師で自分たちの舟を所有していた。同じ12弟子で元漁師だったヤコブとヨハネは、彼らの父がその舟の所有者であっただろう(1:19-20)。

1986年1月末にガリラヤ湖の底で紀元1世紀の舟が発掘された。



それによると長さ 8.2m、幅 2.3m、高さ 1.2m、少なくとも 11 種類の木で作られ、通常は 5 人位の乗組員で、帆でもオールでも航行できたということである。

この発掘から当時の舟について想像することが容易になった。

おそらくこの時 12 弟子とイエスが乗っていた舟もそう変わりはないだろう。とすれば、小さな釣り舟に大人が 13 人も乗っているのだから、それだけで満員であったことが想像できる。浮力も弱く、水面との距離も物凄く近かったかもしれない。

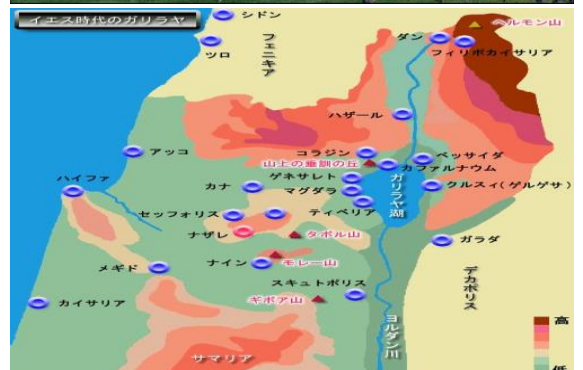
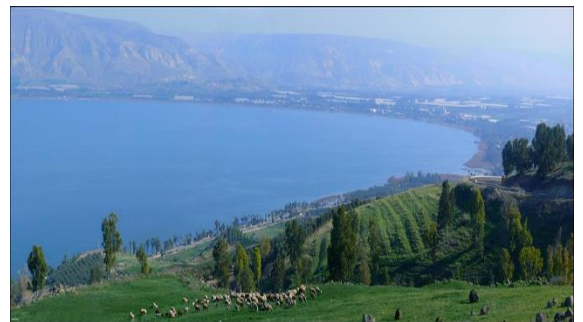
こうした状況で彼らは「向こう岸」まで向かっていった。

しかしそこに、37 v 「突然、激しい突風が起った。」

直訳では「この上もなく生じる突風」という言葉である。「突風」とは突然吹いてくる風のことである。そしてその勢いは、「この上もなく」というものだった。つまり予想もしなかった激しい嵐がおこったのである。

ガリラヤ湖の規模は、海拔マイナス 200 メートル、周囲 53 キロメートル、南北 21 キロメートル、東西 13 キロメートルで最大深度は 43m の湖である。それほど大きな湖ということではない。しかし四方が小高い山々に囲まれたすり鉢状の地域である。そのため周囲の山々から突風が吹き下ろすことがあり、また急に雲が厚くなり、雨が降り出すこともある。

それゆえ当時の一般的な漁は、岸边からわずか 100~200 メートルのところまで漁をし、突風が吹いてもすぐに戻れるようにしていたそうである。沖に出てしかも突風が吹いたとなれば、いくら漁師といえどもお手上げであったのである。



突然の激しい突風により、湖は荒れ、「舟は波をかぶって水でいっぱいになった(37v)」。  
弟子たちは突然の嵐に翻弄され、理性を失い「溺れて死にそう(38v)」と、イエスに訴えた。

ところが、そのイエスは弟子たちに起こされるまで、この嵐の中でも、舟の「とも」のほうで寝ていたのである。「とも」とは「船尾(後部)」のことである。舟としては一番安定しているところで、さらに一段高くなっているところである。かじを取るのもその場所である。

しかし、幾ら安定していると言っても、舟が水でいっぱいになるほどの嵐ならば、先の宣教活動でどんなに疲労困憊していたとしても、眠っていることなんて出来ないはずである。

もし本当に深い眠りに入っていたのであれば、弟子たちから起こされた時に、周りの状況に少なからず驚きがあったはずである。

しかしそうではなかった。むしろ、イエスはそのような嵐が来ることをすでにご存知だったかのように、その嵐のなかでも平然として眠ることができる平安を持っていたのである。弟子たちは、イエスと一緒に、先のあれほどの宣教活動を体験していたのにもかかわらず、それが分からなかったのである。

このとき弟子たちは、イエスの身の安全のために起こしたのではない。自分のことだけを考えて、イエスを起こした。

その時言ったのが、38「先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか」という言葉である。直訳すれば、「私達が減んでも構わないのか？」という言葉である。

助けてもらう方が、助けてくださるお方に対して、何とも上から目線の傲慢な態度の言葉である。

彼らの言葉は、状況を把握せず眠りにについているイエスに対して、明らかに苛立った思いからの非難めいた言葉である。

現代風に言い換えれば、『肝心な時に使えないヤツだ。』ということだろう。あるいは『神ならば、もっと事前にこうしろ、ああしろ、・・・』などと、自分の都合で神を雑用使用したのかもしれない。

私は、これこそが私達人間の中にある最も多くの神に対する愚かさではないかと思う。

人は、『自分がいったい何者か?』ということをおきまえていないことが多い。そして人はいつも自分が一番であると思いがちである。困難な状況になればなるほど周りが見えなくなり、自分のことだけになっていくことが多いだろう。そうして神を自分の道具として使ってしまうのである。

けれどもイエスは、こうした神に対して傲慢で、冒瀆するような弟子たちであっても、その求めに応え、風と湖に「黙れ静まれ(39)」と言われ、嵐を静められました。

ここにイエスの更なる偉大さと人々へのへりくだりと柔和さを見ることができる。

そして、イエスは彼らの「弟子」としての問題に対して、「どうしてそんなにこわがるのですか。信仰が無いのはどうしたことです(40)」と、彼らの不信仰な心を指摘された。

弟子たちは、主であるイエスが一緒に居てくださるということだけでは不十分だったのである。

そして自らを取りまく周りの状況に対する恐怖心で盲目になり、神に対して批判的な思いにまで至ったのである。

彼らが、もし「イエスは、まことの救い主であり、この世のすべてを支配されている全地知全能の神である」ということをおきに知っていたのなら、まさに嵐の中でも眠ることができる平安が与えられたので

ある。

イエスは、この本当の信仰と神から与えられる平安を弟子たちに与えたいと願っておられたのである。  
言うなれば、この嵐の出来事は弟子たちに与えられた信仰のテストでもあった。(参照：申命記 8:2-5)  
私達も、状況に左右されずに、どんな時も神により頼むことができる信仰と、また全てのわざわいから救い出して下さる神に信頼していくことを学ばせていただきたい。

最後に、私の知り合いの田口吉元牧師（元ペルー日系人宣教師）の話をして終えたい。

1996年12月17日ペルーの首都リマで、日本大使公邸を左翼ゲリラ「トゥパク・アマル革命運動(MRTA)」の武装部隊が襲撃した。ゲリラは約800人もの人質を取り、解放の条件として、獄中の仲間全員の釈放や革命税(身代金)の支払いなど4項目を要求した。やがて人質の大半は解放されたが、ペルー政府高官や日本大使館員、日本企業駐在員ら72人が最後まで残された。その中の一人に田口吉元師がいた。田口師は、ちょうどクリスマスの時期でもあったため、銃を構えたゲリラの者たちに、『クリスマスだから礼拝をさせてくれ』と頼んだ。人質の誰もが殺されるのではないかと怯えたそうだが、ゲリラの人々は、礼拝を許可してくれた。その時語ったメッセージがまさにこのマルコ4:35-41の「嵐を静めるのは誰か」ということであった。

人々は、砂漠の砂が水を残らず吸い込むように、御言葉を吸い込んだそうだ。

事件は、発生から約4か月後の127日目の97年4月22日に、政府軍の特殊部隊140人が公邸に突入し、人質のペルー人判事1人と特殊部隊員2人、ゲリラ14人全員の計17人が死亡し、日本人24人を含むその他の人質は無事に生還した。

私達にも人生の嵐が時としてある。その時、全ての嵐から助け出してくださるのは誰か！それは主イエスである!!イエスは私達を救い出すために実に十字架でご自身の命をも投げ出してまでも救い出すお方なのである。そのことをもう一度深く噛み締めたい。

詩編 107:23-31 にはこのように記されている。

107:23 船に乗って海に出る者、大海であきないする者、

107:24 彼らは主のみわざを見、深い海でその奇しいわざを見た。

107:25 主が命じてあらしを起こすと、風が波を高くした。

107:26 彼らは天に上り、深みに下り、そのたましいははじめにも、溶け去った。

107:27 彼らは酔った人のようによろめき、ふらついて分別が乱れた。

107:28 この苦しみのときに、彼らが主に向かって叫ぶと、主は彼らを苦悩から連れ出された。

107:29 主があらしを静めると、波はないだ。

107:30 波がないので彼らは喜んだ。そして主は、彼らをもその望む港に導かれた。

107:31 彼らは、主の恵みと、人の子らへの奇しいわざを主に感謝せよ。

嵐を静めるのは主イエスなのである。